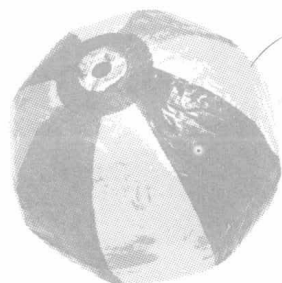


山中貞雄作品集



江苏工业学院图书馆
1 藏书章

山中貞雄作品集 1

一九八五年二月一日初版第一刷発行

監修 佐藤 忠男
加藤 泰

発行者 増田 義和

印刷 東京研文社
製本 共 文 堂

発行所 実業之日本社

東京 銀座 一―三―九
振替 東京 一―三―六
電話 東京 五三三―五三〇一(編集)
五三三―四四四一(販売)

ISBN4-408-41026-8

山中貞雄作品集

1

目次

中村仲蔵 7

なりひら小僧 59

恋と十手と巾着切 79

武蔵旅日記 105

磯の
源太 抱寝の長脇差 137

口笛を吹く武士 153

右門捕物帖
三十番手柄 帶解け仏法……………175

薩摩飛脚 後篇……………203

盤嶽の一生……………243

鼠小僧次郎吉 前篇（江戸の巻）……………271

風流活人剣……………295

解説 佐藤忠男……………313

解題 千葉伸夫……………341

装幀 安彦勝博

写真提供 川喜多記念映画文化財団
小山田幸生

山中貞雄作品集

1

凡例

- 一、本作品集は、山中貞雄の脚色、原作並脚色、及び監督作品のうち、現存するすべてのシナリオを収録したものである。
- 一、底本として『山中貞雄シナリオ集』（上下巻、竹村書房刊、昭和十五年発行）を用い、シナリオ集未収録作品は初出誌に拠った。
- 一、旧仮名旧漢字を新かな新漢字に変えた。
- 一、文意を損なわない範囲で作品毎に字句の統一を図った。
- 一、読み易さを考えて、適宜、句読点をうった。
- 一、難読及び特殊な読みをするものと思われる漢字には適宜ルビを振った。
- 一、サイレント映画の字幕は、新かな新漢字のみにとどめた箇所も少なくない。

中
村
仲
藏

中村仲蔵（未映画化）

原作並脚色 山中貞雄

Ⅱ (F・I) 道

鍔不付の半次が徳利持って一散に走って居る。

(移動)

(ヘッド・タイトルを道の移動にダブラしたらどうかと思います)

(速やかにF・O)

Ⅱ (F・I) 松平帯刀の邸

一人の旗本、斬られてダダーとのけ反った。

入れ替りに一人がサッと斬り込む。

斬り込んで来た奴を横薙ぎにして左刃高く振り

上げた此村大吉、大見得切った形。

殺陣開始――

遂に大吉、帯刀を斬り倒す。

其処へ半次が漸く駆け付けて来た。「ようよう

死んでるぞ、死んでるぞ」と数多い死体を見て

大喜び。

大吉、ホッと一息付いた所へ半次も来て「旦那、酒だ！」と大吉に酒を渡し、

「サテ、おきよさんは？」と、ある部屋の襖を

開くと、

縛られて居るおきよの後姿。

半次、急ぎ彼女の許へ駆け寄って縄を解く。

大吉は、悠々徳利のガブ呑み。

(静かにダブって)

T 「そんな訳で

とうとう鬼神組を

皆殺しにして

了ったんです」

Ⅱ 江戸の町

話して居るのは鍔不付の半次。

ブラブラ歩き乍ら聞いて居るのが行安寺の五郎

蔵親分です。

半次歩き乍ら尚もベラベラ、

T 「右腕の傷も、案外、軽く

想う女を手に入れて

天晴れ男ッ振りを

上げたまでは

まあいいんですがね」

と半次が言えば、五郎蔵が「それから？」

半次「ササ」

T「それからが

なっちゃ居ないんです」

「悪い事が続いたんです、先ず第一に」と半次。

T「大勢を手に掛けたとあって、

錦糸堀五百石の御邸は

御取り潰しになり……」

「とうとう浪人生活」と云えば、五郎蔵「そりゃそうだろう」半次尚も、

T「その上、

そのおきよって女が

見掛けによらんあばずれでしてね」

と話し続ける半次。

T「旦那に金がないと

知ると、急に

手の掌かえして

水臭くなりやがって、

果は情夫と手に手を

とってドロン……」

(次の画面へダブル)

Ⅱ大吉の浪宅

(前の字幕からダブって)

遺されたおきよの書置き手に呆然自失、ドッカ

と座敷に坐った儘の大吉、

やる瀬なくその手紙胸に抱いて、

T「おきよ！」

悲痛な叫びです。フラフラと立ち上って、足許

定まらず壁に凭れて項垂れる。

室の隅っこに淋しく残された鏡台、とり散らか

された化粧道具、

(それが静かにダブって)

鏡台の辺りに転がって居る一升徳利、もう一つ

コロコロ転がって来て二つコツンと衝突しまし

た。

机に凭れた大吉(数日後の事です)酒呑むのも

嫌だと云った形。

T「淋しいな」

側の半次が相槌打った「淋しゅうムんしょうね」

T「今更、鬼神組と

喧嘩した、あの頃が

懐かしい」

泌々と独り言云う大吉。

T「あの時、皆斬らずに

せめて半分位

残しときゃよかった」

「惜しい事したわい」と半次に向って、

大吉

T「何処かに

喧嘩相手は

ないかなア」

「さアね」と半次の困った顔、大吉の淋しい

顔――

(ダブって)

T「その後は、自棄^ヤになって

誰彼れの差別なしに

片ッ端から、世間相手に

安兵衛もどきの喧嘩商売」

「元に戻って――

歩き乍ら話す半次「落ち振れ果てたあげ句

が……

T「とうとう

今じゃ……」

聞き手の五郎蔵親分がその後引き受けて、

T「此の五郎蔵の

用心棒か」

半次の苦笑。

二人が、とある町角まで来た時、五郎蔵が此の筋を曲ろうと言ひ出した。半次が「親方帰るんじゃないんですかい？」五郎蔵笑って「一服して帰ろう」と先になって角を曲る。

「茶店

四ッ谷見附のお光の茶店。二三人休息して居る。茶店の女が三人ばかり(其の中にお光も居る)。

道行く人を呼んで居る。

と、中の一人が彼方見て「まア親分が」

と云えば他の二人も出て来て三人揃って「親分お久し振り」

半次を伴った五郎蔵の親分然たるところ。

縁台に腰下ろすと女共いそいそと茶なぞ運んで来る。

半次がソツと五郎蔵に囁く、

T「もてますね」

「いや、其れ程でもない」顔の相を崩して得意がる五郎蔵の助平面がジロリと横目で睨んだ。長い事見つめた儘。

可憐なお光の姿。

半次「ハハン」と五郎蔵の顔色読んだ。

「親分一寸

T「いい女ですな」

と、云われて「ウーン」見惚れて居る五郎蔵。

半次が笑い乍ら「親分

T「惚^{ゾイ}ってるんでしょう？」

図星指された五郎蔵親分慌ててお光を見ていた眼を外して「いやなーに」とさりげなく言つてのけたが、半次、尚も「嘘ばっかし」

遂に五郎蔵が「実はな半次

T「俺の方は

別に何とも……」

思っちゃ居ねえんだけれど……」と云って、へへ、と嫌な笑い浮べた。自惚れ笑いつて奴。

T「女の方が、どうやら

俺に気があるらしい」

とうそぶいたものだから、ヘーンと阿呆らしくって、物云えぬ半次。

五郎蔵尚も図々しく、

T「色男はつらい」

と云われて半次は笑い度くなった。「よう、まあ其の面^{オモテ}で」と思ったが「そうですな」と相槌打つ。

茶店の女の一人が、フト彼方見て、誰かを見とめたらしい。「まあー」とお光をかえり見て、

T「お光ちゃん

仲蔵さんよ」

「まあ、仲蔵さん」とお光いそいそと出迎える。

五郎蔵と半次其の方を見れば、

仲蔵とお光。お光が「まあお掛け」と二人仲良

く茶店の縁台に腰掛けて、何やら楽しげに、

ペチャペチャ、誰が見たって恋人同士の甘き囁

き。

見て居た五郎蔵、呆然たり。半次ニヤーと笑つて、親分見れば、五郎蔵暫時見惚れて居たがハッ^ツと半次に気付いて気まずい思い。

お光と仲蔵、尚もペチャペチャ喋言つてる。

広言の手前もあって、五郎蔵のテレ臭い事。
半次が皮肉な笑い浮べ乍ら一矢むくいた。

T「色男は

つろうムんすね」

五郎蔵イライラした。「馬鹿！」と一喝。

余りの大声に仲蔵とお光も吃驚して振り返る。

他の女達驚いて出て来ると、五郎蔵ブンブン怒って「帰る。茶代置くぞ」とブツブツ言い乍ら立ち去る。後から半次「おかんむりや」と続いて去る。

訝し相に見送ってる茶店の女。

お光が仲蔵に、

T「山崎街道の定九郎？」

と問い返す。仲蔵が「うん」と頷いた。

お光が淋しく、

T「つまらん役ね」

と云われて仲蔵も淋しそうに溜息ついた。

お光が、ソゾロに同情した。

T「仲蔵さんは

立派な腕があるのに

情けない役ばかり

演[★]らされるのね」

と泌々云われて、仲蔵も悲しくなった。自棄的な言葉が唇をもれる。

T「それは、私が

捨子だからさ」

「エッ？」とお光「捨子だったら何故、悪いの？」と云った顔。

仲蔵なかば、独り言の様に、

T「立派な親が

ないからだ」

尚も強く、

T「立派な家柄がないからだ」

遂に常日頃心の底に秘めて居た鬱憤が涙と共に迸り出た。

T「芸は大根でも

家柄のある奴は、親の威光で

ドンドン出世する

皆んな家柄のお蔭だ。けれども、私には……」

と言葉をついで、

T「私にはそれが

ないばかりに」

家柄が無いばかりに仲間の奴にまで蔑まれ、

T「何ぞと云えば

捨子の仲蔵と罵られて

のけ者扱い……」

後は言葉出でず、涙を吞んで項垂れた。

お光が彼の肩に手を掛けて励まします。

往來の人が空を見上げ乍ら足を早めます。

茶店の女が空を眺めて、

T「雨らしい」

お光も「ほんに降りそうなお天気」と立ち上り

ます。

仲蔵も「じゃ私も帰ります」と立ち上った。

お光が、

T「其処まで

送るわ」

と言つて置いてイソイソと内へ入る。

他の女達は慌てて縁台を片付けはじめる。

お光前垂外して傘持つて出て來た。

朋輩に後を頼んで、仲蔵に「お待ち遠う」

と二人並んで歩き出す。

暗雲低迷する空——(F・O)

Ⅱ(F・I) 雨の橋

雨の降つて居る河面—— ボヤツと橋の影が映

つてゐる。

欄干に凭れて河面眺めて居る仲蔵。

お光が側から傘きせて居る。二人共物思いに沈

んでゐる態だ。やがてお光が氣をとり直して、

T「明日初日？」

と聞く、仲蔵は淋しく頷く。

お光が力付ける、

T「頑張つてね」

と云われると、仲蔵自信ありげに、

T「頑張る」

先程とは打つて變つて元氣づいた。

T「今迄とは、コロツと

變つた定九郎見せて

皆の奴をアツと

言わせて見せる」

「まあ——」頼もしいその言葉。お光も嬉しか

つた。

T「どんな、定九郎？」

仲蔵はハタと困惑した。首振つて「サー」